

もうひとつの長征

——大後方への旅(十)

楠原俊代

三八

吳徵鎰によれば、その翌日の四月一二日、旅行団の一行は安南でまる一日休息したあと、夕方になってから台児莊勝利の祝賀遊行大会^{デモ}を挙行し、この小さな町をすっかり驚かせてしまった。翌一三日も安南で休息をとる。安南の窮状は清溪「旅行団が三月一八日に泊まった貴州省最小の県」と似たものだ、という。

一方、錢能欣は「安南は三等県で、その経済は黔東の清溪と伯仲。耕地面積は県の全面積の五分の一。城内には公路が通っているが、城内の街巷は清潔さに欠ける。ハンセン病患者がでていると聞いたが、確かなことは分らない」と記すのみで、台児莊勝利の祝賀遊行大会については何もふれていない。

かれらは四月一〇日に永寧で、貴陽八日付の新聞を見て台児莊の大勝利を知ったのであった。⁽¹⁾ ちょうどこのとき武



台兒莊勝利の祝賀大会
『西南聯合大学紀念冊』11頁。

漢で軍事委員会政治部第三庁長として宣伝活動を担当していた郭沫若は、「洪波曲——抗日戦争回憶録」のなかで、台兒莊の大勝利⁽²⁾について当時の軍事ニュースは次のように伝えていたという。

台兒莊当面の敵は、「四月」六日夜のわが軍の総攻撃によって、挾撃された。敵は天険によって頑強に抵抗したが、今朝三時に至って弾薬尽き、全線動揺した。わが軍は士氣ますます上がり、勝ちに乗じて進撃し、敵を一挙に殲滅、かくて空前の大勝を得た。この戦闘における敵の死傷二万余人、歩兵銃一万余挺、重軽機関銃九三一挺、歩兵砲七七門、戦車四〇台、大砲五〇余門、捕虜無数。敵板垣・磯谷両師団の主力はすでにわが方のために殲滅された。

湘黔滇旅行団の一行が目にした新聞記事も、おそらく郭沫若が記しているような内容であったものと考えられる。かれらもまたこの「空前の大勝」にわきたち、疲れを忘れて台兒莊勝利の祝賀大会を挙行了たものであろう。しかし郭沫若はこのニュースについて、さらにつづけて以下のように「拡大宣伝」だと批判している。

今日から見ると、このニュースは噴飯ものだ。事実のところ、敵は台児莊一带から戦略撤退をし、全面的進攻に備えたのだ。それをわが方の「軍師」たちが誇大にしたので、それこそまさに「拡大宣伝」だ。これはもともと「軍師」たちの慣用手段だが、それにしても当時は一般人を勝利の陶醉にまきこんでしまった。

七日にニュースが伝わりだした。その日に提灯行列をくりあげた。家ごとに祝いをし、会う人ごとにおめでとをいいあつた。提灯行列の参加者は、武漢三鎮合わせて四、五〇万、ことに武昌の黄鹤楼の下は人で埋まり、渡し船の客は船からおりられない。提灯が赤々と長江の兩岸にかがやき、歌声、爆竹の音、高い呼び声——まるで全空間が爆発したようだった。

ただし当時の軍事ニュースは、郭沫若の記すとおり「拡大宣伝」であつたとしても、一九九二年刊行の『中国抗日战争図史』には、台児莊大戦では日本軍一万余人を殲滅、抗戦以来もつとも重大な勝利であつた、とする。⁽³⁾ なお、日本軍の資料によれば、台児莊での死傷者は「第五師団・戦死一、二八一、戦傷五、四七八。第十師団・戦死一、〇八八、戦傷四、一三七」〔北支那方面軍参謀部作成〕⁽⁴⁾となつている。また、郭沫若が「敵は台児莊一带から戦略撤退をし、全面的進攻に備えた」というのは、翌五月初旬の徐州作戦の発動、五月一九日の徐州占領にいたる日本軍の動きをさす。⁽⁵⁾ 中国国民政府が武漢駐在の党政軍諸機関の撤退を始めたのは同年六月九日のことであつた。⁽⁶⁾

湘黔滇旅行団の一行は四月一二日と一三日の二日、安南で休息をとつた後、一四日に出発する。その後の行程を呉徴鎰と銭能欣によって見ていこう。



24個の「之」字形に曲がりくねった公路

『西南聯合大学紀念冊』10頁。

四月一五日 〔吳〕〔普安で〕休息。

四月一六日 〔吳〕さらに西にむかって進み、九峰山を通過。はじめて赤土の地層を見る。羅漢松ラカンソウもあったが、これは雲南の油杉である。盤県に到着すると、小学生がそろって出迎えてくれた。盤県は小安順といわれ、まだ

四月一四日 〔錢〕晴。安南を出発。〔吳〕徒歩五里で二十四湾。

〔錢〕公路は蛇行しながら下り、二四個の「之」字形に曲がりくねっている。〔吳〕徒歩二五里で沙子嶺にいたる。沙子嶺は石炭の産地で、ここで〔北〕盤江の支流を渡り、広西坡を上る。坂を登りきると市が立っていた。鶏卵はハンセン病に伝染するおそれがあり、水は腹がはって苦しくなると聞いたが、われわれはどちらも食し、写真を撮った。また二〇里歩いて芭蕉閣を通過、風景はなかなかよく、さらに一五里歩いて普安県に到着。今日の全行程は五三キロ。午後二時に到着したが、これは道中学生たちがほしのままに競歩をしたからである。

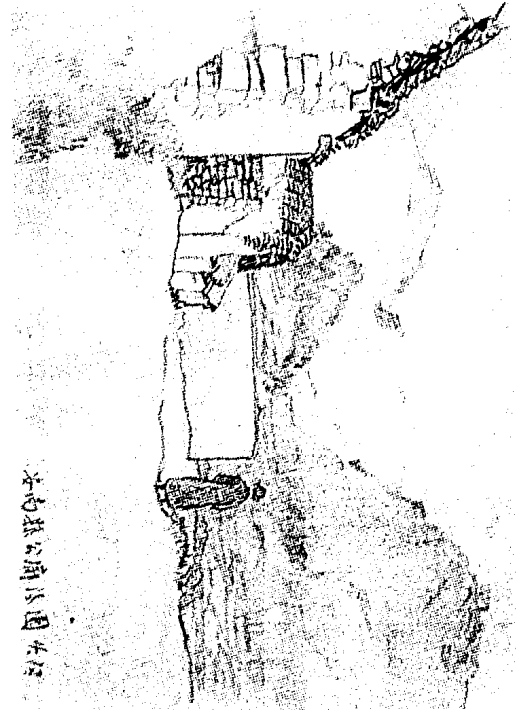
〔錢〕普安県の人口は七万五千人、そのうち苗夷ミョウイは二割を占める。城壁の多くは傾き崩れ、城内の人家は公路の両側に集中している。市街はまだ整然としていたが、人氣がなくひっそりとしていた。

聞一多のスケッチ



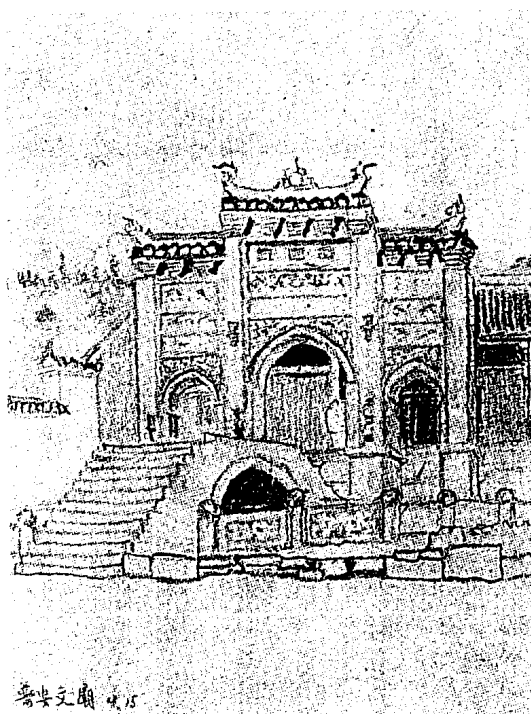
安南縣東門内 4.13

安南縣東門内



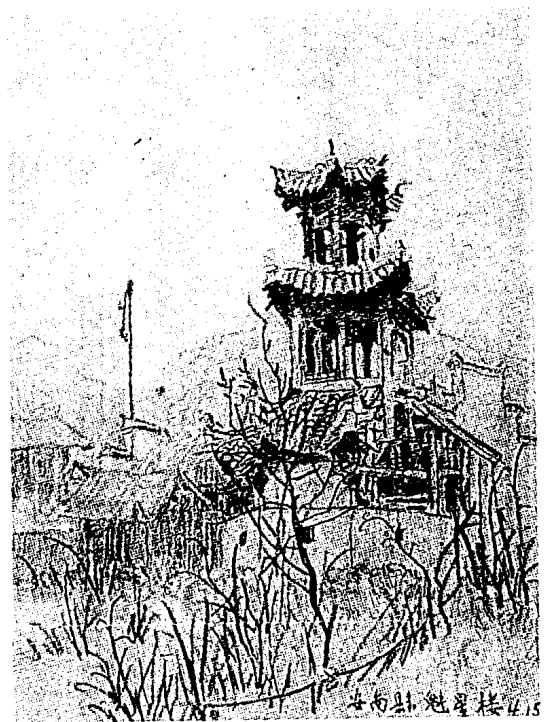
安南縣公署の裏庭

安南縣公署の裏庭



普安文廟 4.15

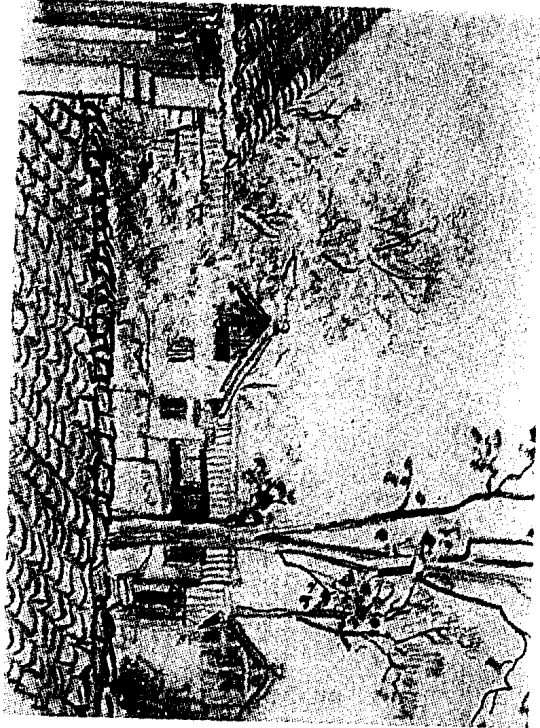
普安文廟



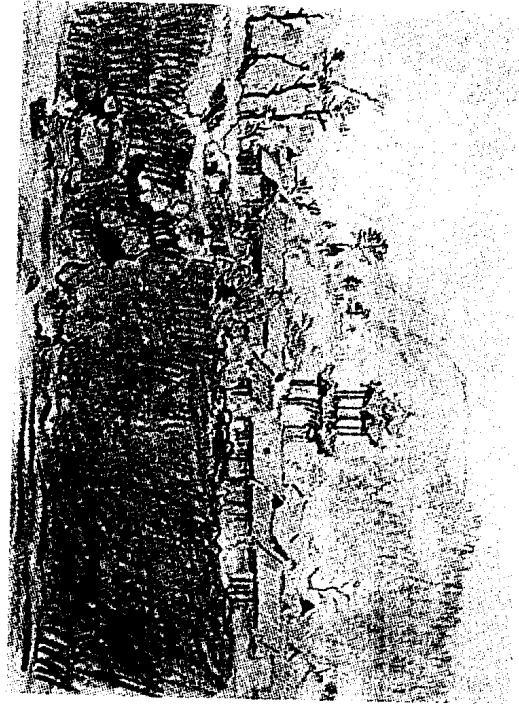
安南縣魁星樓 4.15

安南縣魁星樓

聞一多のスケッチ



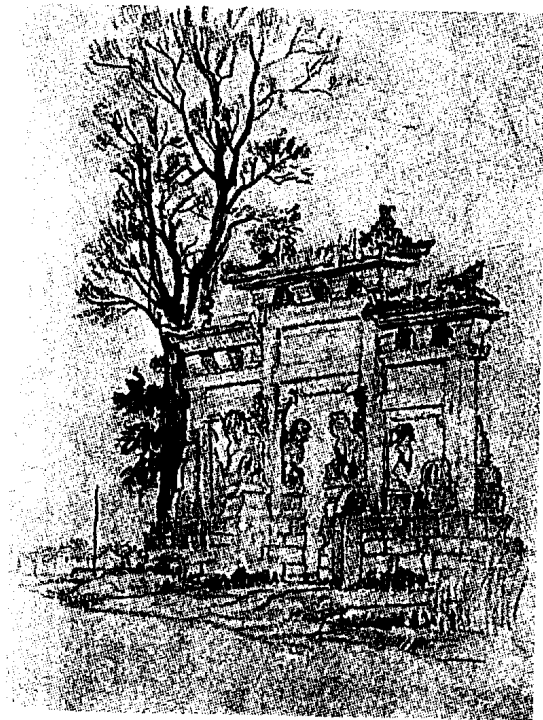
盤県女子小学校の柵の前



盤県近郊



中庭



曲靖北門外の牌坊

繁栄している方であつた。「錢」盤県の人口は二四万五千人、そのうち苗夷は五%を占めるが、大部分は漢人と雜居しており、貴州省中部へ移つていったものも少なくない。

四月一七日 盤県に滞在。「吳」碧雲洞に遊ぶ——錢能欣によれば、碧雲洞は县城の南へ約三里行つたところにあつた。

四月一八日 「錢」日の光は明るく美しく、そよ吹く春風が快い。朝、盤県を出発。大壕鋪の二、三里先には緑色の草原が一面に広がり、近くには池があつた。「吳」次第に雲南の景色になつていくが、道中は荒涼としており、やはり罌粟畑が見られた。今日の全行程は九六里、亦資孔に宿泊。「錢」亦資孔は盤県西区にある大きな鎮で、公路は鎮の南郊を通つている。人民の生活は貧しく、多くのものはトウモロコシを食べていた。

亦資孔については、明治三五年一月一四日、おなじく当地に宿泊した鳥居龍藏が「この地標高一千五百メートル、山中の小村落で、わずかに市街のさまをなし、貴州省の最終駅次として、ここを通過すればすなわち雲南省に入ると記している。」

翌四月一九日も晴。旅行団の一行は一部近道を通つて徒歩約三〇里で海拔千八百メートルの高所に登りつめる。ここが勝境関で雲南・貴州の省境である。さらに一五里歩いて、午後二時、平彝（今の富源）に到着。この日の全行程は六五里。



聞一多（左）と李繼侗

聞黎明『聞一多伝』



勝境関

『西南三千五百里』

亦資孔・平彝間のルートについては、昭和一七年に刊行された『新修支那省別全誌 雲南省』に次のように記されている——平彝を出ると直に山道となり、愈々雲南、貴州省境の山脈に入る。五支里にして豫順関ありさらに五支里行けば山麓の東舗に至る。谷間に河幅三十間の溪流あり。これより省境の峠までは急峻にして敷石なく、赤土路にして降雨時は最も歩行困難である。省境山脈中に位する勝境関（または勝景関）は標高一千八百米にして小鎮店をなす。この地は既に貴州省に属す。平彝よりの上り口に雲南、貴州省境の標門あり。木造の門にして、門上に「滇南勝境」と記し、その左に「東至貴州亦資孔三十五里」右に「雲南平彝县城十五里」と書いてある。貴州省に入ると勾配六十度の下り坂となり、敷石あるも左側は直に千仞の谷に臨む。山中の道幅一間内外である。険阻な峠を上下しつゝ次第に下る。

呉徴鎰は、雲南省に入ってから道の道中は杜鵑ツツジの花が満開で、その様子は貴州省とはまるで違う、という。鳥居龍蔵もまた、雲南省に入ってから、満目の風物ことごとく変化したことを覚える。勝境関から路は少しずつ下りとなり、一千四百五十メートルのところにとると、地形は全く大陸的平原の性を帯び、地質はみな赭土で、貴州省において少なかった樹木は、ここに来ると非常に多く、ことに松樹が盛んに繁茂している。紅色の土地に翠色滴るばかりの松が茂って

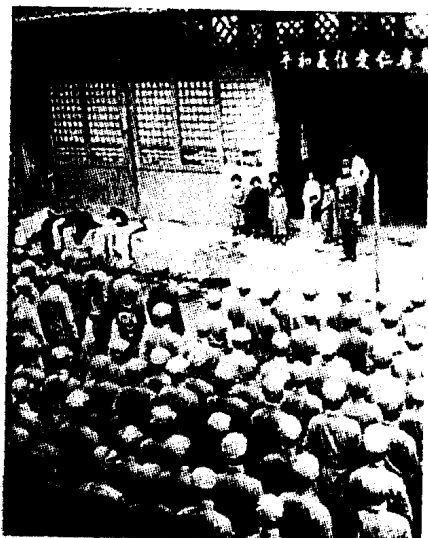
いるのは、色の配合きわめて美観で、一種の模様の風景を現出し、いわんかた無き明媚な眺めであった。始めて平原に出たことを覚えるとともに、貴州省のことを回想すると、全く山中であつたのが悟られる、と述べている。⁽¹⁰⁾

学生たちの旅行は春で、鳥居の旅行は秋になされたものであるが、呉徴鎰と鳥居の記録ではその他にも共通する点が見られる。鳥居は、省境の亦資孔に到着した十一月一日「珍しくも朝来降霧無く、実に快晴の天気であつた。余は貴州省旅行中、かくの如く暁天の晴れ渡つた天気を見たことが無い。けだし雲南省に近づいて地形の変化とともに気象も自ら変わつて来たのであろう」と記す。また「かねて貴州省において、足ひとたび雲南省の境に入ると風が多いと聞いたが、峠道を上り下りして段々雲南省に近づくと、はたして天風蓬々しきりに客衣を払つて来るので、その事実なるを確かめた」と記す。呉徴鎰の日記にはこのように詳細な記録はないが、「晴」と「風」の記述は増えている。

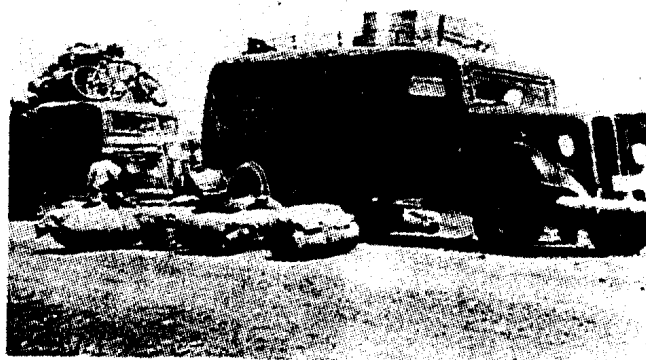
貴州省と雲南省とではその他に言語の面でも大いに異なっている。呉徴鎰は「長征日記」四月二〇日に、平彝は市日で、雲南省に入つて以来「趕場」とは言わずに「趕街」と言う、と記している。「趕場」、「趕街」はいずれも「趕集」〔市へ出かける（市へ店を出しに行く、または市へ買物に行く）の意〕の方言であり、集・場・街は市の意。中国郷村にある定期市の地名のうち、「市」に相当するいい方には、墟・場・街・店・莊・集・屯・堡などがあるが、それらの地理的分布には明らかな地域性があつて、場と街の境界線はほぼ貴州省と雲南省の省境に引ける。

長沙を出発以来二カ月にしてようやく旅行団の目的地である雲南省に入ることができた。昆明まではまだ二二一キロもあるとはいえ、言語も風物もことごとく変化し、山道もやや平坦となり、春うららかに花開き、ついに苦しみも尽きたと、みなは勇躍前進したのだった。⁽¹¹⁾ 呉徴鎰によれば、一行は二〇日も平彝にとどまり、全員が県長から昼食に

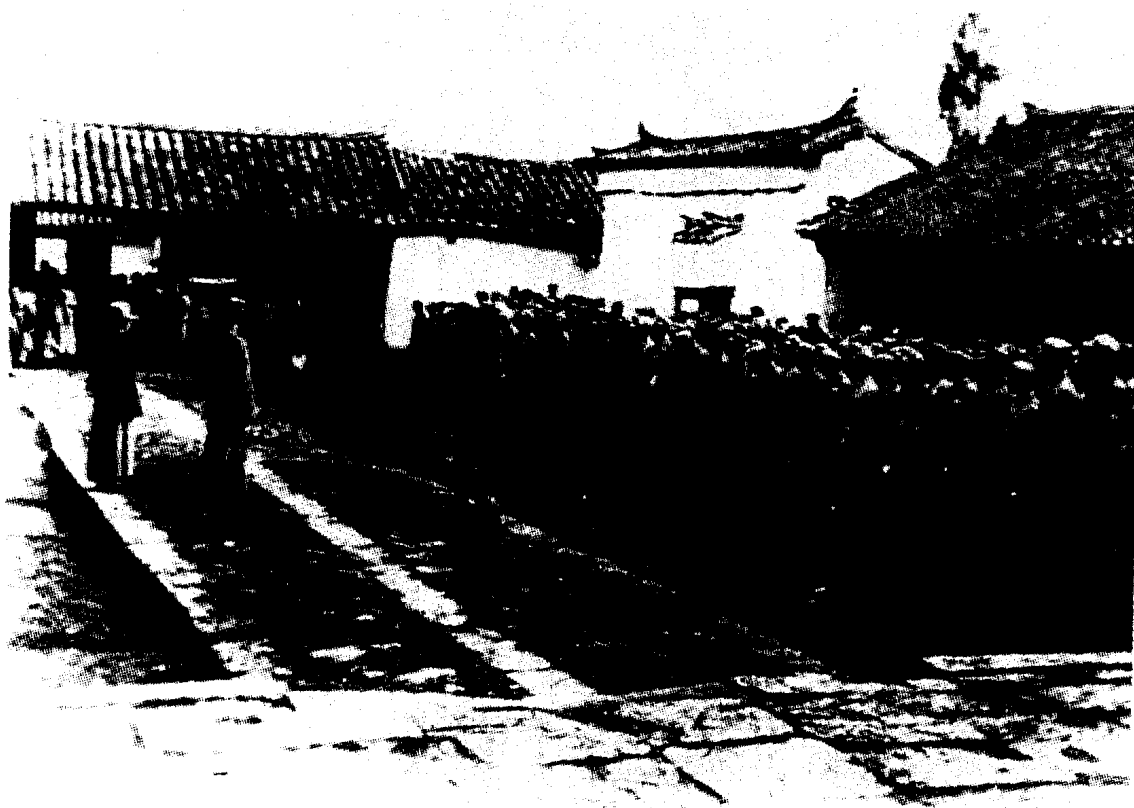
27 もうひとつの長征



出発前の注意事項を
聞く学生たち



雲南省政府が提供した
旅行団の荷物運搬用自動車



平彝県の役所で県長の歓迎をうける
『西南聯合大学紀念冊』15頁。

招待され、午後は青溪洞に遊んだ。他には、平彝県内には大きなアンチモン鉱があり、甲状腺腫にかかっているものが多い、ともいう。

三九

四月二一日〔錢〕六時〔平彝を〕出発。東の空は白みはじめていたが、月はまだ空に残っていた。小さな城はまだ熟睡中で、われわれは静かな街道を後にした。〔呉〕一日中、石灰岩の小山を多く歩く。道はいたって平坦、果松の林がとぎれることなく続き、計六五里歩いて白水に到着。〔錢〕白水は曲靖県に属していたが、二年前に金泉鎮と改名し、昨年より霑益県に属する。

四月二二日〔呉〕晴、風が多い。雲南入つてからはずっとこのような天候である。公路の一八二キロの里程標のところを通りかかると、ちょうど霑（益）宣（威）路の建設工事中であつた。〔錢〕これより以西、公路の両側とも耕作可能な平地が多かつたが、残念なことに多くは未開の荒地のままであつた。

〔呉〕あわせて四五里歩いて霑益にいたると、からりと大平原が開け、そこには畦道が縦横に走つて、風にゆらぐ麦の穂はもう黄色く、油菜や蚕豆はいまにも熟れんとしていた。このような風景は常德以来ほとんど見られぬものであつた。霑益で食事をしたが、保長は銅鑼をたたいて飯屋に物価を上げないように頼んでくれた。〔錢〕

われわれは少し水を飲んだだけで、慌ただしく霑益を後にした——霑益では昼食をとったものか、あるいは「打尖」であったのか。団員によって慌ただしく水だけ飲んで出発したものもあれば、食事をとったものもあったのだらうか。

〔呉〕さらに三〇里歩いて曲靖に到着。〔銭〕曲靖到着は午後四時（今日の全行程は七五里）。

劉兆吉は一九七九年に発表した「聞一多先生二三事」⁽¹²⁾のなかで、かれは霑益の荒れはてた廟の壁から次のような歌謡を写してきた、と記している。

田裏大麦青又青、
畑の大麦は青々とし

莊主提槍敵窮人；
地主は銃をもつて貧乏人をたたく

莊主仰仗蔣司令、
地主は蔣（介石）司令をたのみとし

窮人只盼老紅軍。^{*}
貧乏人は老紅軍だけをまつ

*二万五千里の長征部隊が霑益県を通過したとき、人民はこれを「老紅軍」と呼んだ。

劉兆吉によれば、聞一多はこれを見ると興奮して「これこそが人民の心の声だ。紅軍が人民から敬愛されていることは、これによって知ることができる」と語った。劉兆吉はこの類の歌謡も、道中十余首採集した。聞一多とかれはこれらの資料を重視し、初めに整理していたときには、『西南采風録』、「民怨」の章にいつしよに採録しようと思っ

た。しかし、当時は書物を出版するにはまず初めに国民党中央宣伝部書刊審査委員会の審査をうけなければならず、もしも蔣政権を風刺したような文字があれば、通過しないばかりか身を滅ぼすことにもなりかねなかった、という。ところが一九四六年一二月に刊行された『西南采風録』の初版本、「民怨」の章には、^(B) 露益で採集した作品として、この歌謡にきわめてよく似た以下の作品が収録されている。

田裏大麦青又青、

畑の大麦は青々とし

莊主提鎗敲百姓；

地主は銃をもつて庶民をたたく

大麦只怕天氣旱、

大麦は日照りだけがこわい

莊主只怕老紅軍。

地主は老紅軍だけがこわい

このことを、いったいどう解釈すればよいのであろうか。一九七九年に発表された「聞一多先生二三事」に記された歌謡が実際に採集されたもので、『西南采風録』所収の歌謡は国民党中央宣伝部の審査を通過させるためにやむを得ず書き改めたものなのだろうか。しかし「聞一多先生二三事」では、そのことについて何もふれてはいない。「聞一多先生二三事」を読んだ限りでは、この歌謡はそういう理由で割愛されたものと解釈された。ところがこの歌謡にきわめてよく似た作品が『西南采風録』には採録されていて、そのことがたいへん意外なものに思われる。『西南采風録』所収の歌謡には、たしかに「蔣司令」の文字はないが、「地主は銃をもつて庶民をたたく」、「地主は老紅軍だけがこわい」という句なら問題なく審査を通過することができたのであろうか。本書が序文の書かれた一九三九年春ご

ろまでに編集を終えていたものであるなら、統一戦線下において地主と紅軍もしくは一般庶民との対立を示す第二句と第四句は問題がなかったのか。本書が発行された一九四六年一月といえは国共内戦期であったが、この程度なら国民党中央宣伝部の審査を通過することができたのか。

劉兆吉が「聞一多先生二三事」のなかで、『西南采風録』所収のおなじく霑益で採集した、きわめてよく似た歌謡についてまったく何もふれていないことがひつかかる。あるいは、「聞一多先生二三事」を執筆していたときには本書が手元になく、歌謡採集は四〇年以上も前のことであり、記憶間違いをしたのであろうか。劉兆吉によれば、本書は「四人組」時代には「走資派〔資本主義の道を歩む実権派〕」がかつての国難のときに「山水に遊んだ」ことの罪証となり、残っていた何冊かの『西南采風録』は図書館から一掃され、家にあつたものも没収された、という。また、この歌謡は紅軍兵士が廟の壁に書いたものであつたという可能性はないのであろうか。長征の途中、各人毎日三回、スローガンを書いて革命の宣伝をせよという掟があつたという。なお劉兆吉は、霑益では先にあげた「高山点豆^(註)豆葉黄」で始まる情歌も採集していたのである。

四月二三日 曲靖に滞在。「呉」曲靖県城は周囲六里、その城壁ははなはだ堅固。「城内の」石畳の道は幅広く、通りに面した店舗は古めかしく整然として、家屋が矮小なのを除けば、北平に似た感じであつた。南門を出て曲(靖)陸(良)路を南に三〇里行くと温泉があり、「銭」あまり大きくはないが、水温は高かつた。

四月二四日 「銭」前夜の大雨と大風で気温がたいそう下がり、朝になつても空は黒雲におおわれていた。雲

南省の気候にはもともと春夏秋冬というものがなく、「四季に寒暑なく、ひとたび雨が降れば冬に變ず」で、数日前には雹が降つたという。

〔吳〕七五里歩いて馬龍に到着。松林の多くが牧畜と放火⁽¹⁶⁾のために毀たれていた。〔錢〕今日の全行程は七〇里。〔馬龍城の〕西門外一里ほどの公路の傍ら、関帝廟の筋向かいに象塚の石碑と牌坊があつた。象塚は道路建設のため掘り起こされてしまつていたが、石碑と牌坊はまだあつた。牌坊には「忠勇異象之坊」と刻まれていたが、石碑は地面に倒れていた。⁽¹⁷⁾おそらくはもとの位置にはなく、残念なことに割れ、上半分は行方不明。残つた部分は、表面の泥を除くと文字を判読することができた。この象塚については、次のような話が伝えられている——明の天啓年間のこと、この地に兵乱が勃発し、陶土司は軍令を奉じそれを平定した。その戦乱のとき、陶の飼養していた象がある夜多量の泥水を鼻に吸い、咆哮跳躍して敵營に迫り、鼻に含んだ泥水を噴きだした。それに驚き浮き足立つた敵兵はついに潰走したが、このとき象は毒矢にあたつて死んだ。居民はそれを記念して義象塚をたてた。

四月二五日 〔錢〕馬龍から易隆まで、公路を行けば四六キロ（九二里）で、昆明までの旅程の中では多く歩いた方である。われわれは二カ月来、歩行タイムを測るため歩行距離と所要時間を記録してきた。この日は、朝は晴で無風、七時二〇分に出発し、一〇時二〇分に何家村に到着、三時間で二〇キロ歩く。一五分休んでまた出発し、一一時四五分に河邊に到着、七五分で九キロ歩く。半時間休んで一〇キロ歩き、そこでまた一五分休んで三時五分に易隆到着。歩いた時間はあわせて六時間四五分で、平均すると一キロ八分四五秒で歩いたことになつ

た（注、同行者は一人）。

易隆鎮は尋甸県に属し、人家は百五、六十戸あり、区公所が設置されている。街には何軒かの簡易旅館があり、一晚四分で泊まることができた。

〔呉〕易隆には中阿小学校があり、曲靖にはイスラム教の礼拝堂があった。⁽¹⁸⁾ 雲南省の回民勢力は元・明二代にわたって続々と移住してきたものである。

四月二六日 〔銭〕昨夜は民家に宿泊。南京虫と蠅がでて安眠できず。易隆を出発。〔呉〕七〇里歩いて、楊林に到着。乾いたばかりの楊林海の盆地はすこぶる大きく、地味も肥えていた。〔銭〕この盆地は本来は大きな湖で、地図上の楊林海である。いまは乾燥して、青草が生い茂る自然牧場となって放牧できるが、雨季になると四方の山々の水がすべてここに集まり、たちまち見渡す限りの湖になってしまう。

〔呉〕楊林鎮は嵩明県に属する大きな鎮。^{まち}〔銭〕人家は約千四百戸。通りは縦横に走り、街はわりあいのにぎやかで、小昆明と称される。肥酒が名産。

四月二七日 〔呉〕楊林を出発し、長坡をへて昆明県に入ったところで大雨に降られる。六〇里あるいて、大板橋に到着、宿泊する。大板橋は〔省都〕昆明東部の大きな鎮。^{まち}午後、龍泉寺、花果山の水簾洞に遊ぶ。

聞一多、李繼侗両教授の髭は、もうずいぶん長く伸びていた。二人はいっしょに写真を撮り、抗日戦争に勝利を収めるまでは髭を剃らぬことを誓った。だが李教授は「晩節」を全うすることなく、昆明に到着するとまもな

く髭を剃り落としてしまった——ただし旅行中には、旅の慌ただしさや疲れから、多くのものが髭面になった。⁽²⁰⁾
 なかでも聞一多の髭はとくに長く、道中みなはかれを「大鬍子^{ターフェイス}」「大髭」と呼んだが、それでも微笑んで頷いていた、⁽²¹⁾という。

四〇

四月二八日、旅行団の全行程の最終日について、錢能欣は、全員無事にこの旅行をおえることができ、だれもが格別の喜びを胸に大板橋を出発。陽の光は明るく美しく、道端の楊柳や梧桐の枝という枝には青葉が生い茂り、ときたま蟬の声まできこえてくるが、暑苦しくはない。ここはもう初夏なのである。冬の沅水と春の桃源を慌ただしく通り過ぎてきたばかりなのに、ここから先は夏なのであった、と記している。

さらに錢能欣によれば、昆明から四キロの所に賢園という個人の墓地があった。樹木や花々がひっそりと美しく、われわれはここで一休みして装いをととのえ前進、一時間で昆明の街に到着する。われわれは東門から街に入り、広々とした石畳の道を進んで、滇越鉄路の駅の大門をへて槐の木陰でおおわれた金碧路を踏んだ。両側には家々が整然とならび、その多くはセメントでできた三階建ての建物であったが、大きな商店はあまり多くはなかった。歩道を行き交う人々はもう夏の装いで、白い日傘のあいだに安南の三角形の麦藁帽子がいりまじり、^{クーリー}苦力たちは汗を流しながら駆け回っていた。街中に陽の光があふれ、南国風情たっぷりであった、という。

一方、吳徵鎰は次のように記している。

四月二十八日 「大板橋から」四四里^{（四）}歩いて、昆明に到着。

状元楼から四キロのところにある賢園でひとまず休憩、主人は茶菓でもてなしてくれた。午後、旅行団の一行は隊をととのえ出発、拓東路を通過のさいには梅〔貽琦〕校長および学校首脳の歓迎をうけ、花も贈られた。金碧路をへて近日楼に入る。軍容ははなはだ整然としていたが、前方で大きな葬列にぶつかり、ゆつくりと進んでいくより他なかった。雨のなか訓辞を受け、全員の記念写真を撮った。

それから数日後、黄〔子堅〕^{（五）}团长は海棠春〔飯店〕において全員を招いての大宴席を設けた。数十テーブルに酒もつけて旧雲南紙幣でわずかに五千元^{（六）}しかかからず、半数近くが酒に酔った。その後、大観楼でも茶話会が開かれ、聞〔一多〕・李〔継侗〕二老も出席、唐繼堯の銅像の下で旅の思い出話がはずんだ。またこのとき各人の撮った写真もあわせて展示された。

昆明に到着したときのことを、『雲南師範大学校史稿』^{（七）}によって補足すれば、先に到着していた学校指導者や教師学生たちは、「黔滇公路の」昆明東駅で旅行団を出迎え、その後隊伍をととのえて昆明市区に入った。近日楼を通り抜け、円通山に到着後、旅行団指導委員会主席黄子堅は旅行団の成員に話をした。かれは、学生諸君は年若くして三千里を歩き、人々の貧しい生活と文化的教育的に立ち遅れた状況をその目で見たわけであり、それぞれみずからの責任を自覚し、発奮して大事をなし国家を振興しなければならぬ、と述べた。黄子堅の話がおわると、黄師岳团长は

旅行団の昆明到着



花籠を贈る娘たち



賢園



中央研究院の歓迎の垂れ幕



老人坊で

上右：『西南聯合大学紀念冊』16頁。
他：楊步偉『雜記趙家』23、24頁。



昆明市街



旅行団を歓迎する梅貽琦



学校首脳と旅行団引率の教師たち



握手する 蔣夢麟と黄師岳団長

上：『西南三千五百里』

他：『西南聯合大学紀念冊』16、17頁。

旅行団の成員を点呼したあと名簿を丁寧に梅貽琦校長に返還し、引率者としてのみずからの任務が完了したことを示した。梅貽琦は旅行団の教師学生に心からの歓迎の意を表し、円通山で記念撮影をした。

趙元任夫人楊步偉²⁵によれば、旅行団が歩いて昆明の街に入ってくるさいには、「一多が旅行団に参加するなら、棺桶もいっしょに運んでいかなければ」といわれた、あの聞一多が隊を率いていた、という。旅行団に贈られた花については、章元善の二人の娘と趙元任の二人の娘が花籠を贈った。この花籠は、旅行団が昆明に到着する数日前、蔣夢麟夫人陶曾毅、黄子堅夫人と楊步偉の三人が相談して旅行団に贈ろうと、街に出かけて花を注文し、大きな竹籠を購入してこしらえたものだった²⁶、と記している。また旅行団は趙元任らの住居——中央研究院歴史語言研究所も昆明に移転してきており、語言組は拓東路華洋義賑会にはいつていた——の前も通過したが、そこにはかれらを歓迎する大きな紅い垂れ幕をかかげ、こどもたちは「It's a long way to 聯合大学. It's a long way to go!」²⁷とうたった。五月一日にはみなで粽をこしらえて学生たちにご馳走しようということになって、楊步偉の所に夫人等が集まり、お手伝いさんも加わって粽を千個こしらえてご馳走した、ともいう。

吳徵鎰は、湘黔滇旅行団の全行程は、長沙から晃県まで六三五・五キロ、晃県から貴陽まで三七二キロ、貴陽から盤県まで四一二・三キロ、盤県から昆明まで二四三・八キロ、合計一、六六三・六キロ²⁸であり、「三千五百華里」とうたわれた。しかし、船や車に乗ったのを除けば、実際に歩いた距離は、確かな記録はないが、だいたい二千六百里であるにすぎない、という。

それでも旅行団の全行程は、東北新幹線で岩手県の北上から仙台、東京をへて、さらに東海道・山陽新幹線で九州の博多までの距離に相当し、実際に歩いた距離も東京・博多間の一、一七五・九キロをはるかにしのぐものである。

緯度でいえば、だいたい日本の秋田に相当する北平・天津から奄美大島に相当する長沙にまではるばる南下して長沙臨大を開設したかれらであったが、わずか三方月余でさらに長沙から西の方、昆明まで、これだけの行程を歩いて避難したのであった。

浦薛鳳は、長沙臨大を雲南まで移転し聯大に改めるということは実に容易ならざることであった。西安臨大⁽²⁹⁾がおなじく歩いて陝西省西南部の漢中まで移転していくさいに周某教授が病死してしまったのにたいし、長沙臨大の湘黔滇旅行団では、道中、大病や事故もなく、全員が無事に昆明に到着でき幸運だったといえる、と記す⁽³⁰⁾。

吳徵鎰によれば、二月二〇日^{（モ）}の朝から四月二八日の午後まであわせて六八日間の旅行であったが、そのうち船や車に乗ったりあるいは天候に阻まれて進めなかつた日、休息の日を除けば、実際に歩いたのは四〇日、一日平均六五里、ちょうど宿駅間の距離に相当する。かれもまた、曾昭掄教授は坂を上り下りするたびに一歩たりともおろそかにすることなく必ず曲がりくねった公路に沿って歩き、旅行団全員のうち歩いた距離は最長であろう、と述べている。その他の輔導団の教師の歩いた距離については、おおむね学生達と大差はなかつた。学生も各人がそれぞれ宿営の手配や物品の購入、荷物の運搬等の任務を担当し、一日かあるいはそれ以上車に乗ったからである、という。

より厳密にいえば、全旅行団の教師学生および炊事夫合わせて三百余人のうち、途中病気または職務の関係で退団し、車に乗って先に昆明へむかつたものは四〇余人。教授五人のうち二人は中途退団した。黄子堅は職務の関係で先に昆明へ行つたが、それまでの道中でもしよつちゆうのように車に乗っていた。袁復礼も歩けなくなって車に乗ることが多く、始めから終わりまで歩きとおしたものは李継侗、曾昭掄と聞一多の三人のみ。旅行団の昆明到着に、人々は驚き呆れかえつてしまふとともに、心からの敬服の意を表した。

以上は、旅行団が昆明に到着してから二日後の四月三〇日付で聞一多が妻に宛てた手紙に記すところである。この年の一月に郷里をあとにして以来、家から一通の手紙をうけとることもなく旅立った聞一多に、昆明へ到着すると三月三日付の妻と子供たちからの手紙が届いていた——この手紙には、これより前に三通の手紙を出していたというが、それらの手紙はすでに蒙自に転送されてしまっており、昆明でも受けとることができず、五月三日に昆明を出発し四日に蒙自に到着してようやく読むことができた。⁽³¹⁾

久しぶりに家からの手紙を受けとって、聞一多は徒歩旅行や昆明の印象について、四月三〇日付手紙に詳しく書き記している。この手紙によれば、旅行団到着の翌日はちょうど清華創立二七周年記念⁽³²⁾で、会に出席したものはほぼ千人近く、悲喜こもごもだった。また、昆明は北京に似ていて感慨無量だ。熊迪之は去年こちらにきて雲南大学校長をしている、という。常德や貴陽でもそうであったように、昆明にも大勢の人々が避難してきており、このときほぼ千人近くもの清華関係者が昆明に滞在していて、しかも昆明が北京に似ているのであった。なお、熊慶来（一八九三—一九六九、字は迪之）はそれまで清華大学算学系教授。

先に昆明に到着していた教師学生たちが湘黔滇旅行団の一行を出迎えたというが、海路をとった学生たちがいつ昆明に到着したかについては、四月四日に聯大蒙自分校に到着していた学生は九二人、同月一六日の雲南日報の報道によれば、聯大教授三〇余名と学生一二〇余名がすでに蒙自に到着との記録⁽³³⁾があるのみで、はっきりとは分からない。しかし、聯大蒙自分校に設置されたのは文学院と法商学院のみであり、旅行団の昆明到着時にはもっと多くの学生が昆明に到着していたものと考えられる。浦薛鳳も四月二一日に百七、八〇人の学生が海防を出発していったことを記していた。⁽³⁴⁾ 教師については、楊步偉が、二月八日から続々と昆明に到着しはじめ、二八日には五〇人（家族を含む）

が大学に到着した、と記している。⁽³⁵⁾

昆明が北京に似ていることについては、錢能欣も次のように述べている——勝境関をすぎると、見渡すかぎりの平地がひろがり、陽光をいっぱいにあびて一面に豆や麦がみのり、雲南はまるで華北のようだという印象を持った。それからの道中、昆明はどれほど美しい都市だろうと、さまざまに想いえがいてきたのであったが、昆明の美しさはわれわれの予想をこえるものであった。たちならぶ樓閣や路地裏の小さな入り口に、われわれは古都北京をしのばずにはいられなかった。昆明の街の西には翠湖があり、数百畝もの大きさで、そのなかには堤がはしり、半島もあった。周囲には樹木が生い茂り、日暮れ方、日差しが傾いてすがすがしい風がゆるやかに吹いてくるころ、はるかに円通山の方亭をながめれば、さながら「北京の」北海から景山を望んでいるかのようにだった。

注

- (1) 本稿第三六章九四頁参照。
- (2) 郭沫若「洪波曲——抗日戦争回憶録」、『人民文学』一九五八年九月号一一四頁、「抗日戦回想録」（岡崎俊夫訳）、『中国現代文学選集第一五巻・記録文学集Ⅰ』（平凡社、一九六二年）所収、三七、三八頁。本章において用いる郭沫若の回想はすべて本書による。「洪波曲——抗日戦争回憶録」は、一九四八年、香港にあった郭沫若が『華商報』の副刊「茶亭」に連載していたもので、その後『人民文学』一九五八年七月号から一二月号まで半年にわたって連載され、一九五九年四月には百花文芸出版社から出版された。
- (3) 『中国抗日戦争図史』中編四〇一頁。また『抗日戦争紀事』五六頁にも、四月六日、台児荘大勝利、この戦役で日本軍一万余人を殲滅、四月七日、武漢三鎮では十万人が台児荘の大勝利を祝った、と記す。
- (4) 『戦史叢書 支那事变陸軍作戦（2）』四一頁。
- (5) 『戦史叢書 陸海軍年表』二二〇―二四頁には、以下のように記す。
一九三八年
三月二四日、第一〇師団の一部、台児庄の攻撃を開始。
四月二日、第五師団の坂本支隊、台児庄東方地区に進出。
四月六日、第一〇師団の瀬谷支隊、台児庄を撤退し北方へ転進。
四月七日、大本営、徐州作戦実施を下令。第五師団の坂本支隊、台児庄付近を撤退し北西方へ転進。
四月一八日、第一〇師団、台児庄方面へ攻勢開始。
五月七日、第二軍、徐州作戦発動を下令。
五月一九日、第一三師団、徐州占領。
- (6) 本稿第二六章一九頁参照。
- (7) 『抗戦中の西南聯合大学』所収の呉徵鎰「長征日記」による。『清華大学史料選編』第三巻（下）所収の「長征日記」には「三五キロ」と記す。しかし錢能欣『西南三千五百里』にも「今日の全行程は百里（五〇キロ）」とあるため、本稿では『抗

戦中の西南聯合大学』所収の「長征日記」によった。なお、東亜同文会支那省別全誌刊行会『新修支那省別全誌刊行会』新修支那省別全誌第四卷 貴州省（東亜同文会支那省別全誌刊行会、昭和一八年）六六〇頁には、安南・普安間は九〇支里と記す。

(8) 鳥居龍蔵、前掲書、九一頁。以下、本章において用いる鳥居龍蔵の記録はすべて本書九一、九二頁による。但し、本書の「また資孔……」は、原著の鳥居龍蔵『人類学上より見たる西南支那』（富山房、大正一五年）一八八、一八九頁によれば、地名「亦資孔」の誤りである。

(9) 『新修支那省別全誌 第三卷 雲南省』（東亜同文会支那省別全誌刊行会、昭和一七年）一七三〜一七五頁。但し、原文では「彝」は俗字で表記されているが、引用のさいには本文の「彝」に統一した。

(10) その他に、鳥居龍蔵は亦資孔から勝境関までのルートについて、「この路にあたる土地は、貴州・雲南両省の境を走る山脈であつて、地質は赭土多く、これまで通過した石灰岩地方（貴州省）に比して自ら地貌の異なるところあるを覚えしめる」と記している。

(11) 蔡孝敏「旧来行処好追尋——湘黔滇步行雜憶」、『清華校友通訊』新六二期所収、二〇頁。

(12) 「聞一多先生二三事」、前掲雜誌、一〇九、一一〇頁。

(13) 『西南采風録』一七四頁。

(14) 「聞一多先生二三事」、前掲雜誌、一〇九頁。

(15) 本稿第三三章七三、七四頁参照。

(16) 「放火」の原文は「縱火」。「放火」については、『新修支那省別全誌 第三卷 雲南省』第三章林業、第一節概説、八七〇頁に次のように記す（但し、原文を新仮名遣い、新字体に改める）——雲南省は全省殆ど山岳地帯にして、古は鬱蒼たる大森林地帯をなしていたといわれる。往古漢族が南進して本地方に入り、蛮族及び猛獸等を駆逐する為め、火田法を行つて山林を焼き払い、或はこれを伐採して開墾したので、次第に森林は減少するに至つた。しかし、前清道光年間頃迄は、なお至るところに樹木密生していた。その後、内乱に會し、人跡の至る所山林は多く蹂躪され、また、製塩用の燃料としてこれを伐採使用したため、山林は次第に減少し、以て今日の状態に至つた。現在雲南省東北部地方に於ては殆ど秃山をなし、従つて一方木材に不足するとともに、他方、間接に水害及び干害の災いを齎らしている。

(17) 明治三五年(一九〇二年)十一月十九日、馬龍に滞在していた鳥居龍藏もまた「忠象碑」を見に行っている。鳥居龍藏、前掲書、一〇〇頁には、次のように記されている——城の東門を出て南方に行くこと十丁ばかり、道の左側にあたって土饅頭の形をなした堆土がある。それがすなわち象の墳墓で、その前に一基の碑碣が建てられている。時代はあまり古いものとは思われないが、碑面は風雨に蝕まれて、その事蹟を刻した文字がもうすでに磨滅してしまい、読もうとしても読むことができない。ただその前に石門があつて、碑に面した方に「忠勇異象」の四字を刻して表頌してあるのは、十分に読むことができた。

本書によれば、このときには象塚もまだ掘り起こされてはおらず、石碑も立っていたことが知られる。

(18) 曲靖に到着したのは四月二三日、出発したのは二四日であり、なぜ易隆に到着した二五日の日記にわざわざ「曲靖にはイスラム教の礼拝堂があつた」と記しているのか不明。『新修支那省別全誌 第三卷 雲南省』一一四頁によれば、霑益・曲靖間は三〇支里、曲靖・馬龍間は五三支里で、霑益より曲靖を経て馬龍に出るのは三角形の二辺を経るので、霑益より直接馬龍に至るより約一五支里遠い。そのためか、鳥居龍藏は霑益から曲靖を通ることなく、直接馬龍へむかい、馬龍にはその日のうちに到着している。このため曲靖については分からないが、鳥居、前掲書、一〇二頁には、易隆にも、易隆から楊林への道中にも回々教の寺院があつたことを記しており、吳徵鎰の記述は「易隆」の誤りではないかとも思われる。

(19) 『抗戦中的西南聯合大学』所収の「長征日記」による。原文は「滇省回人勢力」であるが、『清華大学史料選編』第三卷(下)所収の「長征日記」では「長征日記」では「滇省回人」とあり、「勢力」は省かれている。

(20) 『聞一多全集』、「年譜」六四頁。

(21) 蔡孝敏「旧来行処好追尋——湘黔滇步行雜憶」、前掲雜誌、二〇頁。

(22) 『抗戦中的西南聯合大学』所収の「長征日記」による。『清華大学史料選編』第三卷(下)所収の「長征日記」には、「四〇里」と記す。『新修支那省別全誌 第三卷 雲南省』一〇四頁にも、昆明・大板橋間は四〇支里とあり、『清華大学史料選編』では、『抗戦中的西南聯合大学』所収の「長征日記」の誤りを訂正したものであるのかもしれない。

(23) 旧雲南紙幣十元が法幣一元に相当。したがって、旧雲南紙幣で五千元とは法幣では五百元。

- (24) 『雲南師範大学校史稿』一二頁。
- (25) 楊步偉『雜記趙家』（傳記文學出版社、一九八五年再版）一〇九〜一一四頁。本書によれば、ちょうど同じころ中央研究院歴史語言研究所も昆明に移転してきており、語言組は拓東路華洋義賑会にはいつていた。趙元任一家は一月一二日に長沙を出発し、第三のコースをとって一月三一日もしくは二月一日に昆明に到着していた。趙元任が長沙を出発するさいには、蔣夢麟と梅貽琦から雲南に到着後、雲南省建設庁長張西林、教育庁長龔自知と臨大の移転先の建物について交渉するよう依頼されていた。蔣夢麟がそれまでに一度雲南におもむいていたのだが交渉がまとまらず、そこで趙元任が張西林らともう一度交渉して、移転先の住所が決まってから、臨大が移転していくことになったのである。趙元任は昆明に到着すると、その翌日の朝早く龔自知と張西林を訪ねた。この件について相談したところ、かれらの多大な尽力により、さっそく拓東路の逸西会館を臨大の臨時住所とすることができた、という。
- (26) 『南開大学校史』二四三頁には、旅行団に贈られた花について、「梅貽琦、蔣夢麟他、多くの教師学生が昆明自動車東駅で道の両側に並んで歓迎した。蔣夢麟夫人陶曾毅、黃子堅夫人梅美德らが歩行団のメンバーに花を贈った」とのみ記す。
- (27) これは、第一次大戦中、英国兵士が行軍歌として愛唱した“*It's a long way to Tipperary*.”で始まる“*Tipperary*”の歌の替え歌であろう。
- (28) 「大事記」記載の行程と、呉徴鎰の記述に、若干の異同がある。本稿第二〇章四〇頁参照。
- (29) 西安臨大とは、国民政府教育部が国立北平大学、国立北平師範大学、国立北洋工学院等を陝西省西安に移転して、一九三七年一月一日に設立した国立西安臨時大学のこと。一九三八年三月には山西省臨汾が陥落して、日本軍が陝西との省境、風陵渡にまでいたる。このため西安臨大は三月一六日西安をはなれ漢中へ再度移転、四月三日国立西北臨時大学に改称された。『中国高等学校簡介』（教育科学出版社、一九八二年）六二六頁。『教育大辞典』第十卷（上海教育出版社、一九九一年）一五七頁。
- (30) 浦薛鳳『太虚空裏一遊塵——八年抗戦生涯隨筆』八一頁。
- (31) 聞一多の四月三〇日付および五月五日付妻宛手紙、『聞一多書信選集』二八四〜二八七頁。
- (32) 宣統三年すなわち一九一一年四月二九日に清華学堂が開校、それ以後、毎年四月最後の日曜日を学校の創立記念日とし

- た〔『清華大学校史稿』一一頁〕。
- (33) 『雲南師範大学大事記』一八頁。
- (34) 本稿第二四章一一頁参照。
- (35) 楊步偉、前掲書、一一三頁。